

場所：アパート（外）

ある日曜日のこと。

航はご飯を食べに行くために、自分のアパートにある自転車置き場へと向かった。

SE：すずめが鳴く  
ドア開閉

航 「今日が日曜じゃなかったら、あの店行くんだけどなあ。今日の昼飯は何にしよう」

SE：窓ガラス開く音

航 「ん？」

ふと窓ガラスが開く音がし、その方向に顔を向けた。  
そこには、下着姿の女性。

「お、めっちゃいい天気！ じゃ洗濯もの干そうっと」

「あ」

「あ」

「え、え、あ…」

「やっべ やっべ」

結

SE：窓ガラス閉める  
カーテンひく

女性は慌てて窓ガラスを閉めてカーテンをひく。

航はぼつんと取り残された。

航（モノ）

（い……………今、下着姿の……………え……………ええっ……………！？

む、むむむ、胸が……………ブラ……………、下……………ば、パンツ……………！！！！）  
※混乱

鼻血が出そうだった。彼女がいたことはあるし、童貞でもない。  
でも……………こんな真昼間に女性の下着姿を見ることになるとは思って  
なかったものだから、自分の体は素直に反応してしまう。

航

「……………静まれ、静まれ、俺っ……………！！」

自転車置き場の片隅で、航はうずくまった。

航（ナレ）

あの衝撃の出会いの翌日、俺は結さん…もとい、近田結さんと一緒に飲み屋に来ていた。

場所…居酒屋

SE：環境音（ガヤ）

結

「昨日はごめんね？ 見たくないもの見せちゃって。三十近いおばさんの下着姿なんてねー！」

航

「びっくり、しました」

結

「野間くんが初めてだよー、今まで誰とも会わなかったのに」

航

「しょっちゅうしてるんですか」

結

「お風呂あがりでき、着替えるのめんどくって」

航

「俺じゃなかったら襲われてましたよ」

結

「大丈夫大丈夫、こんな干物女を相手にする物好きじゃないよ。いるとしても野間くんだけ」

航

「まさか、俺の隣の人がこんな人だとは……」

結

「大将ー、ビールおかわり！」

航

「飲み過ぎです！」

結

「いーの いーの。私お酒は強いからね。賭ける？」

航

「俺弱いからいいです。というか結さん」

結

「あに（何）？」

※食べながら

航

「結さんは下の名前で呼んでくれないんですか？」

結

「下の名前なんだっけ？」

航

「航です」

結

「ああ、そうだった悪い悪い！

……でもさ、私は好きになった人じゃないと下の名前で呼ばないの」

\*

航

「じゃあ好きになってもらえばいいんですね？」

結

「……どした？ 酔ってる？」

※半笑い

航

「酔ってません！」

結

「うお、急に大きい声出さないでよー」

航

「あ、すみません……。でも、その、俺は結さんのこと」

結

「だいたいさ、あんなの見たら、変に勘違いしてるんだよ。

お隣さんなんだし、好きとか嫌いとかそういうのナシで仲良くしてよ」

航

「勘違いじゃなくて、俺はもっと仲良くなりたいって……」

結

「それが勘違いなの。干物女を相手にしてる暇あったら、会社のかわいい女の子でも捕まえてきたら？」

見た目かっこいい方なんだし余裕でしょ」

結はそういつて焼き鳥を食べる。

ビールを一口飲むと、深いため息をついた。

結

「……野間くんみたいな純粋な子、苦手なんだ」

航

「え？」

結

「純粋な人は、すぐ他の人に染められていく。

……私は、そんな人とは仲良くできない」

航

「俺は他人に流されたりしません」

結

「かもしれないね。でも、勘違いを自分の本気だと思ひ込む癖がある

のは同じみたい。目を覚ましなさい」

SE：イスから立つ音

結

「あ、そのビールはあその彼にあげて。それで会計」

航

「結さん」

結

「野間くんが私をどう呼ぶかは好きにしていよ。

じゃあまたね、お隣さん」

結は笑ってそう言うと、店を出て行ってしまった。

SE：足音（ヒール）  
レジの音  
ドア開閉

航（モノ）

（結さんは干物女だと言ってたけど……前に他の友達と家で飲んでたことがあるのはしってる。すごいにぎやかだなんて、それで顔も知らない隣の人はどんな人なんだろう、って……）

結（回想）

『勘違いを自分の本気だと思い込む癖があるのは同じみたい』

航（モノ）

（同じみたい？ 誰と？ 結さんの心を捕らえている人？）

航

―それは、「純粹な人」？

SE：席を立つ音  
ギャFO

「……とりあえず、俺も帰るか」

航はそういつて、運ばれてきたビールを一气飲みすると店を後にした。

\*

場所：アパート（外）

SE：環境音（朝の交通音など）

足音（革靴）

航

「あ、結さん」

※少し気まずそうに

結

「ああ、おはよう。あれ、会社？」

※航の気まずさに気付かない

航

「はい。本当はオフだったんですけど、呼び出されちゃって」

※結のさっぱり具合に少し緊張が和らぐ

SE：足音（革靴、ヒール）  
歩き始める

結

「大変だねー、サラリーマンも」

航

「そういえば、結さんは何のお仕事を？」

結

「派遣だよ、派遣」

航

「正社員じゃないんですね」

結

「正社員は、嫌なんだ。たとえ給料良くても」

航

「何かあったんですか？」

結

「君には関係ないよ。っと、私こっちだから。じゃあね、野間くん！」

SE：足音（ヒール）走る↓消える

航

「あ、ちよっ、結さん！  
……話してくれなきゃ、結さんが抱えてるもの、俺には分からないんだけどな」

SE：環境音 FO

\*

SE：環境音  
足音（革靴）

航

「なんで休日出勤なんか……、早く帰って寝たい……ん？」

航（モノ）

（あそこで誰かといあってるの、結さん？）

結

「だから、興味ないんだって。帰ってよ」

SE：足音（革靴）走り寄る

航

「結さん！」

※どうしたんだろう、と心配しつつ。

結

「あ、野間くんいいところに！」

航

「え？」

SE：環境音 FO

\*

場所：アパート(部屋)

航

「さっきはびっくりしました」

結

「あはは、あの男しつこくって。

急に婚約者のふりして、とか無茶ぶりしてごめんね。はい、お茶」

SE：テーブルにマグカップを置く音

航

「ありがとうございます。さっきの男性は会社の人ですか？」

結

「そう。でも今日ので大丈夫だと思う。野間くん、かっこよかったよ！  
“そういうわけなのでお引き取り願えますか” って！」

※“ ”内は航の真似をするように

「結さんは、その…：特定の人とか、作らないんですか？」

航

「彼氏ってこと？ 今は考えてないなあ。

というのも、男性不信だから」

結

「え？」

航

「そんな風には見えない、とでも言いたいんでしょう？ 友達からもよく言われる。男性と話すのは平気だよ、でも恋愛とかそういうのはごめんだな」

航

「原因は何ですか？」

結

「結構つっこんで聞いてくるね」

※笑いながら、呆れもある。

航

「話したくなかったらいいです、すみません。

…でも、よくわからないまま避けられるのは、嫌だなんて」

結

「…：それもそうか。じゃあ、お隣さんだし、助けてもらったし、野間くんには話しておくね」

BGM：シリアス調 FI

結

「今は縁を切ってるけど、友達以上恋人未満な関係の男性がいたの。その人は優しく、真面目だった。野間くんみたいなんだって」

結

「同い年で話や趣味もあって、仲良かった。でもいつからか、彼はだんだん性格が変わって行って、次第に私に暴力をふるうようになった。最初は我慢してたよ、私しか頼れないんだって思って。」

我慢した結果、体に暴力のあとが残って、親に心配されて通報されて、彼は逮捕された。精神的な病気にかかってたみたいだけど、その原因は彼が会社で受けてたいじめのせいだったって後で分かった。彼は勘違いしてたの、私の友人としての好意を恋愛的な意味でとらえただけじゃなくて、いじめてるのは私だって。バカみたいでしょ」

結 (回想)

『勘違いを自分の本気だと思い込む癖があるのは同じみたい』

航 (モノ)

(だから、あのときあんなことを言ったのか)

BGM：シリアス調 FO

航

「結さんは、まだ男性に暴力を振るわれると思ってる？」

結

「頭では分かっているの、みんながみんなそうじゃないって。でもさ、体にしみついちゃってるんだ、あの時の恐怖が。それでまた、自分が傷付くなら、最初から相手にしなきゃいいんだーって結論に至って、男性不信になっちゃったっていう情けない話」

航

「情けなくありません」

結

「そう？ ありがとう」

航

「もし自分だったら……女性不信になってるかも」

結

「ええ？ 野間くんはそんなことないと思うけどなあ。」

あの人は純粹で周りに影響されやすく、精神がもろかった。

君は私がどれだけ突き放しても犬みたいに食いついてくる根性ある奴だもん、大丈夫だよ」

BGM：ゆったり調 FI

航

「じゃあ、俺で試してみませんか？」

男性不信、なおるかもしれませんよ」

結

「何言い出すかと思ったら……、」

無理してなおすものじゃないでしょ？」

航

「無理になおさなくていいです。結さんが嫌って思うまでいいから、俺を結さんの視界にうつしつづけてください」

結

「……なんでそこまで言ってくれるのかな」

航

「その人が超えられなかった壁を、俺は超えたい。友達っていう壁を、結さんの中の男性像を壊して、ちゃんと野間航って人間を見てほしいって、思うから」

結

「それってつまり？」

航

「最初はお隣さんからいい、友達からいい。だから……俺の彼女になってください。自分で言うのもなんだけど、俺、忠犬だから、結さんのこと守るから」

結

「……ふーむ、弱ったな  
※少し笑いながら

航

「え？」

結

「野間くんがどういう人かっていうのは、私なりに理解してるつもりだよ。本当に犬みたいで。

……私って結構乗っかりやすいタイプなうえに、野間くんのひとつつつかさどずっと慕い続けてくれる様子に少し引き寄せられてる。だから、さっきの嘘が嘘じゃなくなっちゃうときが来るのかなって」

航

「さっきの嘘、って……」

結

「男性不信、もう五年目だから治るかどうかわかんないけど、野間くんに託してみるのも悪くないかもね。私もいい年だし。………ひとまず、よろしく、お隣さん」

航

「！ はい！」

航  
(モノ)

(自分でもよく分からなかった。どうして結さんのことをこんなに気にかけるのか。きつと、彼女の出す危ない雰囲気……ほっておいたら自殺でもしそうな、表では元気そうなのにふとしたときに見える危なっかしさにひかれたのかもしれない。)

俺と一緒にいるときの、楽しそうな結さんを見ていると、あの時、あんな形でだけど、彼女と出会えて良かったって思う)

結・航

「となりのひと」(タイトルコール)